

平成 25 年度 教員活動自己点検・評価報告に対する 副学長総合コメント

運営については、各専攻内業務、各委員会業務を通じて、各教員、事務員の努力には頭が下がる。特に、本学の学部生の特性に合わせた創意工夫は、教職員の大きな負担になっていると思われるが、それを顧みずに実行されている点に敬意を表する。

教育についても、それぞれの教員で工夫され、学生の理解度向上に努力されている。ただ残念なことに、その工夫が学生に正確に伝わらないもどかしさを感じる。例えば、低学年にとって科目自体が難しく、難解な内容であれば、「難しい＝教員評価が低い」となる傾向があり、学生アンケートだけをもって教育評価をすることはできない。同様に、教員の自己点検評価と学生アンケート結果の乖離についても、一概に何らかを判定することはできない。

研究については、研究活動が活発に行われている状況ではない。大学教員である以上、研究成果を社会に還元していく活動は業務の一環である。各教員のより活発な研究活動を期待する。ただし、昨今の研究倫理に対する世間の評価や近々に改訂される「臨床研究倫理指針改め（仮）人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」を十分に理解して研究を進める必要がある。特に理学療法士、作業療法士の教員は、研究倫理や研究方法論について十分な教育を受けていない場合が散見され、間違った解釈で研究が行われていることもある。今後は十分に注意し、少なくとも本学教員が研究責任者となる研究計画については、本学の倫理委員会に附す必要があると考える。

総合的に見て、昨年度同様、教員間の業務量の差が顕著である。教育、研究、運営にバランス良く活動することが望まれる。「忙しすぎる」との声を聴くことがあるが、何をもって「忙しい」とするかは、判断が難しい。平成 27 年度からは大学院で、平成 28 年度からは学部で新教育課程の運用を開始するよう準備を進めている。この中で、各教員の業務量の均一化と業務の見える化を進め、客観的に仕事量が評価できる仕組みを構築する必要があると感じる。

大阪保健医療大学
副学長 石倉 隆